

このたとえ話は「自分は正しい人間だとうぬぼれて、他人を見下している人々」に対して語られたたとえ話です。それが誰であるかは特定されてはいません。たとえ話の中ではそれはファリサイ派の人の姿として描かれていますが、それはファリサイ派だけの問題であるとは言えないのです。主イエスの弟子たちの中でさえ、「誰が一番偉いか」という議論が起こり、主イエスから叱責を受けるということもありました。主の教会の中においても、自分は正しい人間だとうぬぼれて他人を見下すということが起こる危険性は常に存在するのです。いえむしろ、クリスチャンは徴税人のような明らかな罪人であるよりも、ファリサイ人のような隠れた罪人となる危険性の方が高いとさえいえるのではないのでしょうか。私たちは自分を徴税人の立場において安心するのではなく、自分自身の中にファリサイ人のような傲慢な姿勢が無いかどうか、吟味して見なければならぬのです。

このたとえ話の中のファリサイ人の祈りは、一応感謝の祈りの形を取ってはいますが、その内容は自分と他人との比較の中で他人を裁き見下げ、自分の行いを誇っているに過ぎません。彼は自分の義に対して、自分の行いを根拠に確信を持っています。つまりこのファリサイ人は、一応神に祈る格好をしながら、実は神に頼らず自分自身に頼っていたのです。私たちはこのようなあからさまな仕方で自分を誇り頼るといようなことは少ないかもしれませんが。しかし、他人との比較によって自分を評価し、根拠の無い優越感や劣等感にとらわれてしまうことは少なくないのではないのでしょうか。他人との比較の中で自分を評価している限り、本当の自分の姿は見えてこないのです。

一方それとは対照的に、徴税人は遠くに立って、目を天にあげようとしなかったということが記されています。神様の御もとに近づき礼拝を捧げるにふさわしくない、自分自身の罪深さを強く自

覚しているゆえの態度といえるでしょう。そして彼は胸を打ちながら言いました。「神様、罪人の私を憐れんでください。」彼は「罪人の私」と言いました。この表現は、「すべての人は罪人であり自分もその一人である」というようなことではなくて、他人のことは関係なく、「ほかならぬこの罪人である私」というような強い表現がなされています。他人との比較ではなく、自らの罪深さを徹底的に自覚している者の姿がここにあります。

それは「わたしは、その罪人の中で最たる者です。」(テモテ1:15b)と告白したパウロの言葉にも通じる罪の自覚です。自分自身の中に何も頼るものも誇るものもない、ただ神様の憐れみにすがりしかない、罪人としての深い自己理解がここに表されています。

そして主イエスはおっしゃいました。「言っておくが、義とされて家に帰ったのは、この人であって、あのファリサイ派の人ではない。だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる。」神様は高ぶる者をしりぞけ、悔い砕けた魂に愛と憐れみを向けてくださるお方なのです(詩編51:19)。私たちは皆、他人との比較の問題ではなく、他でもないこの自分自身が神のみ前に出る資格のない罪人なのです。しかしそんな私達の為にイエス・キリストは来てくださり、十字架の上で私達の身代わりとなって死んでくださり、蘇ってくださいました。私たちはこの主イエスの御前に日々悔い改めて、全ての罪を赦された者として生活を整えてゆくことが求められているのであり、決してその逆ではありません。生活を整えることによって義と認められるのでは無いのです。私たちは真実な主の日の礼拝の中で、真実な悔い改めて主イエスへの信仰を新たにされ、全ての罪を赦された喜びを持って、新しい生活へと出発するのであります。(吉田 実)

子どもカテキズム

問19 あなたは罪人ですか。

答 はい、私も神さまの御前に罪人です。

ウェストミンスター小教理問答

問16 アダムの最初の違反で、全人類が墮落したのですか。

答 あの契約がアダムと結ばれたのは、彼自身のためだけでなく、子孫のためでもありました。

それで、普通の生まれかたでアダムから出る全人類は、

彼の最初の違反において、彼にあって罪を犯し、彼と共に墮落したのです。

〈罪の自覚〉

子どもカテキズムは、問15で人間の創造、問16で創造の状態からの墮落、問17で罪の定義、問18で罪のもたらす結果、これらを順に教えた上で、「あなたも罪人ですか」と問い、「私も神様の御前に罪人です」と答えることによって、罪の自覚を促す。確かに、罪の意味を知り、私たちが実際に犯している罪を思い起こすことによって、自分が罪人であることを認めることは大切である。しかし、「罪」とは決して自分が自覚しているものばかりではない。むしろ、自覚していない罪の方がはるかに多く、またその罪の方がより重大なのである。そのことを知るためには、「私も神の御前に罪人」であることが何に由来するかを正しく知る必要がある。

〈命の契約と原罪〉

ウ小教理は、問16において、アダムの最初の違反がもたらした結果を教える。答えの冒頭の「あの契約」とは、神様が墮落前のアダムに与えられた「命の契約」のことである。そして、「命の契約」

は、アダム個人のためだけのものではなく、彼からでるすべての子孫のためのものであったことを教える。その意味でアダムは命の契約の代表者であった。その契約にアダムが違反したということは、その結果についても彼のすべての子孫が負わなければならないというのである。すなわち、「アダムから出る全人類は、彼の最初の違反において、彼にあって罪を犯し、彼と共に墮落した」のである。これが罪の源としての「原罪」であり、私たちが含めたすべての人間はこの原罪があるがゆえに罪人なのである。

したがって、私たちが神の御前に罪人であるということは、私たち自身の自覚のあるなしに関わらず、私たちのおかれている現実である。ただし私たちは、神の御言葉である聖書と私たちの内に働く聖霊の御業を通して、私たちの罪の姿を知らされる。私たちが自らの罪の姿を知らされ、それを自覚する時、私たちに与えられる神の救いをも知ることができる。だからこそ、「私も神さまの御前に罪人です」との自覚と告白は私たちにとって大切な意味を持つのである。（松田基教）

テキスト ルカによる福音書 18章9～14節
カテキズム 子どもカテキズム 問19

〔単元のねらい〕

聖書の光に照らされるとき、人ははじめて真の自己を、また自身の罪の真相を知ることができる。しかしみ言葉をとおして罪を知らされ、罪の自分を悲しむ人はさいわいである。主イエスは罪人を救うために世に来られたからである。わたしたちははじめな罪人のままで主イエスのもとに行くことができる。その恵みをわかちあいたい。

「罪ゆるされる恵み」

ふたりの人が、お祈りをするために神さまの宮にのぼりました。ひとりの人はファリサイ人でした。この人はまっすぐ立って胸をはり、心の中でこう祈りました一神さま、わたしは週に二度断食することができます。また、いただいたお金の十分の一を献金しています。わたしがこのような者であることを感謝します。

もうひとりの人は、徴税人と呼ばれる人でした。この人は遠くに立って、目をふせたまま、胸を打ちながらこのように言うことしかできませんでした一神さま、罪人のわたしをあわれんでください。

ファリサイは立派な人です。週に二度も断食するというのはたいへんなことですが、この人にはそれができました。それから、十分の一の献金を守ることができるのも、すばらしいことです。

一方、徴税人のすがたははじめです。この人は自分の罪に打ちのめされて、神さまのもとに近づくこともできず、目を天に上げることもできず、ただ胸を打ちたいて、罪人のわたしをどうかあわれんでくださいと叫ぶことしかできなかったのです。

ふたりの人のうちのどちらが神さまに近いでしょうか。どちらの祈りを神さまはお喜びになるのでしょうか。イエスさまは、それはこのはじめな徴税人のほうであって、あの立派なファリサイ人のほうではないとおっしゃったのです。これは驚くべきことではないでしょうか。

イエスさまがそのようにおっしゃった理由を考えてみましょう。まず、確かにファリサイ人は立派でした。でも、この人は大きな思いがいをしていたのです。この人は、神さまに祈っているようで、実は自分の立派さを誇っていたのです。自分が断食や献金ができることを自慢していたのです。つまり神さまを仰いでいるのではなく、自分のほうを向いていたのです。

献金は神さまの恵みに対する感謝です。わたしたちが食べるものや着るものを日々与えられていること、この地上を生きるうえで必要なものを備えられていること、そのすべては神さまの恵みです。見えるものも見えないものも、すべて神さまがくださるのです。わたしたちが礼拝し、献金し、神さまを信じて生活することができることも、神さまがイエスさまを通してわたしたちを救ってくださったからこそです。わたしたちの生活のすべては、神さまの恵みに対する感謝の応答なのです。

でもこの人は、断食できることも献金できることも自分の力だと思っているようです。つまりこの人は神さまに祈っているように見えて、ほんとうはわたしは自分の正しさ、自分の力で生きていくことができるので、神さまなんかいらぬ、神さまに頼る必要もないと言っているのではないのでしょうか。だとすれば、神さまから遠く離れているのではないのでしょうか。

人はみな神さまのふとところで生きるのです。自分を誇り、神さまのもとを背き離れていくことを、

神さまは何よりも悲しまれるのです。

徴税人は確かにみじめです。けれども、自分が罪人であることを知っていました。実は、自分が罪人であることを知ることこそ、人間にとっていちばん大切な、必要なことなのです。

そして、そのような人こそ幸いな人です。なぜならその人は神さまのゆるしとあわれみがなければ生きていけないことを知っているからです。徴税人の祈りはほんとうの祈りです。この人は神さまに呼びかけるほかはありませんでした。そして、神さまは自分の罪をゆるし、自分を深くあわれんでくださるお方であることを知っていたのです。

人は、外側ではいろいろと正しいことができます。自分を正しい人に見せることができます。でも、自分を正しい人だと信じ、自慢していたファリサイ人は、ほかの人たちを見下げていました。

この罪にこの人は気づかなかったのです。わたしたち人間は、人の目から隠された、心の深い深いところにある罪をこそ、神さまにゆるしていただかねばならないのです。

そして神さまはわたしたちの罪をゆるすためにこそ、ひとり子イエスさまを十字架におつけになったのです。罪なきイエスさまのとうとき血潮によって、わたしたちは罪ゆるされたのです。

わたしたちは自分で自分を救うことはできません。わたしたちはみな生まれながらに罪人です。でも、イエスさまがわたしたちを救ってくださいました。わたしたちはみじめな罪人のままで、イエスさまに近づいたならよいのです。イエスさまがわたしたちをあわれんでくださるからです。十字架の恵みをあふれるほどに注いでくださるからです。イエスさまの招きにこたえましょう。

(木下裕也)

[今週の暗唱聖句] ホセア書 6章6節

わたしが喜ぶのは愛であって いけにえではなく
神を知ることであって 焼き尽くす献げ物ではない。



〈ねらい〉

いよいよ、子ども自身の罪の問題に目を向けます。幼児に罪の自覚がどれほどあるか、年齢、月齢にもよりますが、幼児の実生活にできる限り近づけて自覚を促しましょう。

〈展開例〉

水泳とか、体操とか、エレクトーンとか、英語などを習っているお友だちがいるかもしれません。どれも先生に教えて貰わないと上手になりませんね。でも皆さんは、こういうふうには嘘をつくど誰にもみつからないよ、と上手な嘘のつきかたをお母さんやお父さんに教えてもらったことがありますか？ お友だちのいじめ方を幼稚園の先生に教えてもらいましたか？ もちろん、嘘の付き方やいじめかたをお家の人や先生は教えません。でも嘘をついたことのない人はいません。おけいこごとは教えてもらわないと覚えられないのに、どうして悪いことは教えて貰わなくてもできてしまうのでしょうか。

「でもわたしは〇〇ちゃんよりは良い子だわ」と考えている人がいるかもしれません。けれども、

誰が見ていなくても、みんなに隠していても、どこにいても神さまはわたしたちのこを見ておられます。心の中で、「あの子だいきらい」と思っただけでも神さまは知っておられます。幼稚園で遊んでいるとき〇〇ちゃんが「そのおもちゃ貸して」って言っても貸してあげられない時もあります。優しくしてあげられないときもあります。いったいどうしたらいいのでしょうか。

神さまは悪い子を減ほしたいと思っておられるわけではありません。何とか救ってあげたい、守ってあげようと一生懸命になってくださるお方です。それで神さまはひとり子のイエス様をおくってくださいました。みんなの身代わりに罰を与えてイエス様を十字架にかけられました。「自分の中に罪という悪い黒い心があります。神さまごめんさい、助けてください」という人を神さまは待っておられます。

〈お祈り〉

天の父なる神さま、わたしのつみをゆるしてください。おねがいます。イエス様によって、アーメン。

〈やってみよう〉

「かみさまにかんしゃ」をうたいましょう

「かみさまにかんしゃ」（日本基督教団出版局『こどもさんびか（合本、2）』85番）

○準備するもの

タンバリン・鈴・カスタネットなど音の出る楽器をひとつ教師が持つ。

○こどもは輪になってまわりながらうたう。

○歌の途中で楽器の音がきこえたら、すぐ反対回りになる。

○慣れてきたら、小刻みに音を入れて方向転換を繰り返す。

○「よいもの」のところに、具体的な名詞をいれてうたってもいい。

〈ねらい〉

自分を罪人であると認めることが大切なこと。
それが神さまを求めるといへば至る。

〈展開例〉

1. 人間は皆、罪人です。しかし、そのことを認める人と認めない人がいます。

ある大人の人は、あなたは罪人であると言われて、怒り出しました。私は何も悪いことをしていない、というのです。

2. 自分は罪人などではない、と言う人は、だいたい、自分は法律に違反するようなことをしていない、自分は人の迷惑になるようなことをしてはいない、それなのにまるで泥棒か殺人犯であるかのように罪人呼ばわりをするのはけしからん、というのです。

でも、問題はそういうことではありません。神さまの前で、自分がどういう人間なのか、ということが問題です。

3. 法律に違反しないとか、人に迷惑をかけない、というのは当然のことですね。

しかし、きちんと世の中の規則を守っていても、私たちは罪人です（ザインではなくツミヒト）。神さまの御心に反することを、考え、欲し、行ってしまうのです。

4. 私は罪人ではない、と言う人は、そのように言うことによって、何かを誇っているかのようですね。

そうです、その人は自分を誇っているのです。自分を誇り、神さまを信じようとしないのは、本当に大きな罪です。でも、自分を誇っている

限り、神さまのことはよく分かりません。いや、その人は自分自身のことさえも本当はよく分からないに違いないのです。

5. 人間は、どうしても自分自身の罪はなかなか認めがらないのです。しかし、他人の罪はよく分かります。

イエスさまは「あなたは、兄弟の目にあるおが屑は見えるのに、なぜ自分の目の中の丸太に気づかないのか」（マタイ7:3）と言われました。他人の罪はおが屑のように小さなものでもすぐ気がつくのに、自分の罪は、丸太のように大きなものでもなかなか気がつかない。でも、それではいけないのです。

6. 大切なことは、罪ということを考えるときに、他人の罪を非難することではなく、自分のこととして、この罪を考えなければいけないということです。神さまは私たちの心の隅々まで、すべてをご存じです。その神さまの前で、自分は罪人ではない、と言い切れるでしょうか。

7. 罪人である自分を神さまに赦していただきましょう。心から祈り求めるなら、神さまは赦してくださいます。

私たちの罪を赦すために、主イエス・キリストは十字架の上で私たちのために死んでくださったのです。

8. 罪を認めようとしなければ、罪はそのままその人に残ります。しかし、罪を告白するなら、赦していただけます。そのとき、その人は「罪を赦された罪人」となるのです。

〈ねらい〉

主イエスの罪の赦しの光のもとで、罪人である自分の姿を見つめる。

〈展開例〉**○たとえ話から**

イエスさまの今日のたとえ話には、二人の人が出てきました。

一人は、ユダヤ教の中でもきびしく律法を守ること（たとえば、安息日を必ず守る、断食を必ずする、貧しい人に決められただけはかならず施しをするなど）が信仰のすべて、と考えていたファリサイ派の人。もう一人は、イエスさまと出会う前のザアカイさんのように、人をだましても平気でお金をもうけていた徴税人です。当然のことながら、ファリサイ派の人は徴税人をひどく軽蔑し、見下していました。

しかし、イエスさまは、ファリサイ派の彼らのことを「白く塗った墓」（マタイ23:27）のようだ、と言いました。白く塗った墓の外側は美しく見えても、内側は死者の骨やあらゆる汚れで満ちているように、ファリサイ派の人々は、表面的には着飾り、律法を守り、よい行いをしているように見えても、心の内側では、他の人を見下して軽蔑する、冷たい心に満ちていることをご存知だったのです。

ここに、ファリサイ派の人々にとっての大きな落とし穴があったのです。落とし穴とは、自分は律法を守ることのできる強い人間だ、人々の見本になる良い行いのできる正しい人間だ、と自分のことをそう思いこんでいることです。「わたしは正しい」、「わたしは心の強い人間だ」、だから神さまに頼らなくても、神さまなしでも人々から尊敬を受けることができる……。それは「わたしは、神さまよりも正しくて、強い人間なのだ」と、神さまさえも軽んじて、見下していることに、気がついていないのです。イエスさまは、「ものが見えない案内人」（マタイ23:16）とも言っています。信仰の目で神さまを見ることもできずに、大きな落とし穴にはまっているのにも気がついていないようですね！

イエスさまは、まったく新しい救いの恵みを与えるために、来てくださいました。表面的な正しい行いだけを誇る者のためではなく、自分の罪を悲しみ、自分の弱さを嘆く罪人を救うためにきてくださり、十字架におかかりくださったのです。うつむきながら、胸を打ちながら、「罪人のわたしをあわれんでください」とお祈りした徴税人のように、神さまに罪をゆるしていただいたことを心から喜び、神さまだけをより頼み、喜んで従ってゆくことを望んでくださるのです。

○堅固な土台の上に

では、わたしたちは、どうでしょうか？ みなさんもよく知っている「三匹のこぶた」のコブタたちが建てた家は、それぞれワラの家・木の家・石の家でできていました。ワラの家は、造るのにとっても簡単ですし、木の家も見た目には、おしゃれて立派に見えました。しかし、わらの家も木の家も、オオカミの息で吹っ飛んでしまいました。わたしたちの信仰の成長には、時間がかかるかもしれないかもしれませんが、表面的には、おしゃれて立派には見えないかも知れません。それでも、神さまにつながって、土台を据える為に、まず「悔い改め」の穴を掘って、その上に神さまにしっかりとした「救いの恵み」の土台を築いていただいて、堅固な石である「カテキズム」を一つずつ積み上げていけば、その家は決して倒れることも、吹っ飛ぶこともありません。

『子どもカテキズム』問31の答え、「神さまは私たちの罪を赦して義と認めてくださいました。ですから、私たちは、喜びと感謝をこめて、『私たちの神さま、天のお父さま』とお呼びします」。

〈お祈り〉

神さま、ごめんなさい、わたしも罪人のひとりです。わたしのためにも、イエスさまが十字架にかかってくださって、ありがとうございました。イエスさまのみもとに立ち帰って生きる幸いをありがとうございます。イエスさまの御名によって、アーメン。

〈ねらい〉

自分自身の罪を見つめる。

〈子どもカテキズム〉

問19：あなたは罪人ですか。

答：はい、私も神さまの御前に罪人です。

〈展開例〉

○これまで「人間の罪」や「罪の悲惨さ」について学んできたが、子どもカテキズムはこの問19において、直接、はっきりと私たち一人ひとりに強烈な問いを投げかける。

○この問いを自分自身への問いとして受け止め

る時、どのような答えが出てくるか一人ひとり考えてみよう。

○聖書の中には、多くの罪人の言動や罪についての教えが記されているが、実は、どの箇所においてもこの問いのように「あなたはごうですか。あなたも罪人ではないのですか」と私たち一人ひとりに問うているのである。

○神が与えた「罪の基準」である聖書と照らしあわせながら、自分自身の心をまっすぐ深く見つめ、そして、神の御前に立って、自らの罪を告白することを神は求めておられる。

○詩編32編1～5節を読み、教えられたことを発表しあってみよう。

